

# 辛みのないシシトウ 県オリジナル品種 ‘ししわかまる’の高収益安定生産技術 ～誘引・整枝による仕立て技術の確立～

## 1. はじめに

県が育成したシシトウ‘ししわかまる’は遺伝的に辛みが全く発生しない全国初の品種ですが、慣行品種‘葵ししとう’と同じ栽培管理(N30kg/10a、全枝放任)では草勢が低下しやすく、それに伴って収量や可販果率が劣ります。そこで、当試験場では、2022年度から‘ししわかまる’の施肥や仕立て方法などの栽培管理技術の確立に取り組んでいます。ここでは、施肥量を‘葵ししとう’の倍量とした条件(農試ニュース第142号)で誘引および整枝といった仕立て方法が‘ししわかまる’の収量に及ぼす影響について報告します。

## 2. 材料および方法

‘ししわかまる’及び‘葵ししとう’の2品種を供試しました。白黒マルチを敷設し、2022年4月21日に畝幅160cm 株間70cmで定植しました。試験区は、仕立て方法を変えた‘ししわかまる’3試験区および対照である‘葵ししとう’全枝放任(慣行)の計4試験区としました(表1)。5月24日から10月28日まで収穫を行い、総収量および可販果率(曲がりや凹凸のない秀品および少ない優品の割合)を調査し、可販果収量を算出しました。

## 3. 結果

総収量は、‘ししわかまる’全枝放任区が

9.1t/10aで最も多く、次いで‘葵ししとう’全枝放任区の8.5t/10aでした(図1)。両品種の全枝放任区(③、④)に比べて、主枝を誘引した区(①、②)で総収量は少なくなりました。可販果率は、主枝を誘引した区が約85%で、両品種の全枝放任区と比べて約10%上昇しました。可販果収量は、‘ししわかまる’側枝放任区が6.9t/10aで最も多く、‘葵ししとう’全枝放任区と比べて約10%の増加となりました。

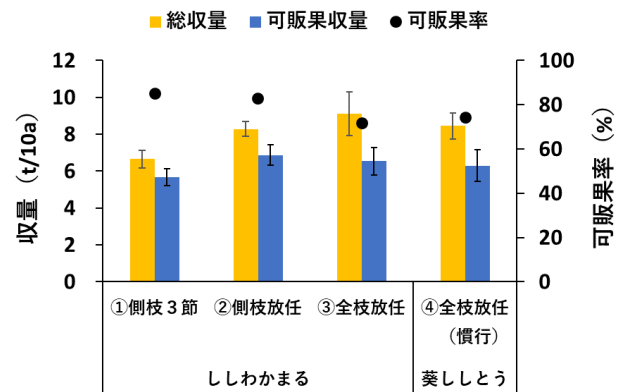


図1 仕立て方法が収量に及ぼす影響  
エラーバーは標準偏差を表す

## 4. おわりに

‘ししわかまる’は主枝4本を誘引することで可販果率が向上し、更に側枝を放任とすることで可販果収量が最も多くなることが明らかになりました。今後は、主枝4本側枝放任仕立ての改良や収穫時間への影響を検討し、高収益安定生産に最適な仕立て技術の確立を目指します。(栽培部 橋本拓真)

表1 各試験区の誘引および整枝方法

品種	試験区	仕立て方法
ししわかまる <sup>2</sup>	①側枝3節	4本の主枝を上から紐で誘引し、6月3日から2週間に1度、主枝先端から約5節以下の側枝を3節で摘心、懐枝は除去。8月下旬以降は側枝摘心なし。
	②側枝放任	4本の主枝を上から紐で誘引し、6月3日から2週間に1度、懐枝および垂れ下がり地表についた枝のみ除去。
	③全枝放任	
葵ししとう <sup>3</sup>	④全枝放任(慣行)	第1分枝の上10~20cmの位置にフラワーネットを設置し、主枝および側枝は放任。

<sup>2</sup>:基肥(有機配合)5kgN/10a+追肥(液肥)55kgN/10a(2022年5月16日~10月19日、1回あたり1.25kgN/10a 計44回)

<sup>3</sup>:基肥(有機配合)5kgN/10a+追肥(液肥)25kgN/10a(2022年5月16日~10月19日、1回あたり1.25kgN/10a 計20回)

調査株数:放任区は1区4株の3区制、主枝4本および側枝放任は1区3株の2区制